

トピック

『イスラーム圏で働く——暮らしとビジネスのヒント』
(桜井啓子編・岩波新書・二〇一五年)の刊行に寄せて

秋山 徹

早稲田大学イスラーム地域研究機構研究助手

春川一郎(仮名)、二七歳。都内の企業に勤める、ごくふつうのサラリーマン。勤務態度はいたってまじめで、上司からの評判も上々。忙しいながらも淡々とした日々を送っている。そんなある日、春川は上司から突然パキスタンへの出向を命じられた。

春川が勤める企業は総合商社で、世界各地に支社がある。だから、突然の海外出向命令も決して珍しくはない。だが、パキスタンに振られるとは夢にも思っていなかった。学生時代に海外旅行の経験はあるものの、英語圏のみ。イスラーム圏には縁もゆかりもない。それにイスラームといえば、正直なところあまり良いイメージはない。ターバンを頭にかぶり、体中に機関銃の弾を卷いた髭面の精悍な男たちが、赤茶けた山岳地帯や砂漠で銃を打ち鳴らしている。テロ、貧困、女性差別など——春川の脳裏にはそんなことばかりが浮かび、気分も憂鬱になってきた。しかし、社命に背くわけにはゆかない。

仕事帰り、春川は情報収集のために地下鉄を途中下車し、大型書店に立ち寄った。

まず赴いたのは旅行コーナー。世界各地を網羅したお馴染みの旅行ガイドをパラパラとめくってみる。遺跡や名所のことは詳しく書かれているものの、あくまでも観光目的の旅行者向けで、長期滞在の手引きにはならなそう。つぎに向かったのが人文書コーナー。イスラームに関係する本はそれなりにあるものの、自分には到底理解できそうにない専門用語が羅列された、分厚い研究書がほとんど。それらに混じってコーランの翻訳も売っているが、自分にはどうも敷居が高い気がしてしまう。どうしたものか……。春川はすっかり途方に暮れてしまった。

*

二〇一五年九月に岩波新書として出版された本書『イスラーム圏で働く——暮らしとビジネスのヒント』は、春川さんのような、日本の企業で働く、ごくふつうの社会人で、突然イスラーム圏への出向・出張命令が下った方々が読者として想定されて



ドバイ・モール内の日本書店に陳列された本書。写真提供＝内藤明香氏(本書第1章筆者)



「働く日本人のイスラーム」講演会の様子。講演者は松本洋氏（本書第1章筆者）

いる。

本書に登場するのは、実際にイスラーム圏で働いた経験をもつ一三名の日本人であり、それぞれの体験が語られている。下記の目次からお分かりいただけるように、本書は地域別（湾岸・アラブ・イラン・トルコ・南アジア・日本）に全六章で成り立っている。だが、必ずしも最初から順番に読んでゆく必要はない。読者のニーズや関心に応じて、地域・業種（商社・石油・建設・食品・観光など）、性別や世代といった、様々な軸をクロスさせながら読むことができる。新書だからかさばることもなく、いつでもどこでも、鞆の片隅にしのばせて、ポケット辞書のように手軽に参照できる。出張や赴任の伴侶として最適の一冊だ。

このように、本書は実用書としての色彩をすくなく有するものである。じつさいのところ、市場規模一六億人ともされ、日本の新たなビジネス・パートナーとして近年とみに着目されつつあるイスラーム圏との付き合い方を扱った書籍はいくつか出版されており、本書もそうしたなかのひとつとして数えることができるだろう。だが、類書にはない、本書の大きな特徴を挙げるとすれば、それは本書が研究者のイニシアチブによって作られたという点ではないだろうか。

ところで、本書の母体となったのは、早稲田大学イスラーム地域研究機構が二〇一三～二〇一四年度にかけて実施した「働く日本人のイスラーム——現場からの

声に耳を傾けよう！」プログラムである。本プログラムの運営に携わった者として、以下にその舞台裏について簡潔に触れておきたい。

社会貢献や研究の社会還元が研究者によく求められる今日この頃。それが「言うは易く、行なうは難し」であるということとは、『イスラーム地域研究ジャーナル』の読者であればきっと身に染みて共感いただけるにちがいない。そうした活動としては、研究者が自身の研究を学生や一般人に向けて、わかりやすく噛み砕きながら、講義や公開講座といったかたちで還元してゆくの一般的なものである。

これに対して、「働く日本人のイスラーム」プログラムにおいて、研究者は教壇から降りた。かわってそこに立ったのは、実際にイスラーム圏で働いたご経験をお持ちの方々である。より具体的には、まず二〇一三年度には、全学の学生を対象とする早稲田大学オープン教育センター（現・グローバルエデュケーションセンター）のテーマカレッジ／全学共通副専攻「イスラーム地域研究」の一環として、学生向けの講演会を毎月ほぼ二回のペースで実施した（翌二〇一四年度には、インタビューを実施した）。もちろん、研究者が教壇を降りたといっても、一聴衆になったわけではない。すなわち、イスラーム地域研究機構のスタッフが交替でモデレーターをつとめ、講演者に質問を投げかけて興味深い話題を引き出し、教室の学生に提供するという、いわば仲介者としての役割を担った。

おかげさまで、本プログラムは学生からも好評を得ることができた。たとえば、「イスラーム圏で働くことに関する具体的なイメージを得ることができた」、「就職についても、普段の就職説明会と違う視点で考えさせられた」、「本でイスラームについて様々な知識を得たが、やはりイスラーム圏を生で体験した人の話はまた違った趣があるなと思った」といった感想が寄せられた。

えてして、研究者は、研究対象について誰よりも多くの知識をもち、深く理解しているという自負を多かれ少なかれいだいてるものだ。だが、本プログラムにかかわるなかで、イスラーム圏と、その現場において真摯に向き合い、体験した者にしか紡ぎ出すことのできない、生きた言葉や知恵があることを痛感するとともに、それらを学生に届けることも、研究者——とくに、ぼくらのような地域研究者——の新たな役割として真剣に見直されてもよいのではないかと感じた次第である。

本プログラムに携わった者として、一般の方々のみならず、研究者の方々にも、是非本書を手にとってみることをおすすめしたい。

『イスラーム圏で働く』目次

はじめに…

イスラーム圏で働く日本人（桜井啓子）

第一章 イスラームの懐に飛び込む…

湾岸諸国

・エリア解説

・メッカ巡礼時期のフライト（内藤明香／元エミレーツ航空勤務）

・砂漠、炎天下の油田開発現場（松本洋／石油資源開発株式会社勤務）

第二章 アラブとの付き合い方…

アラブ諸国

・エリア解説

・情報統制下の大統領インタビュー（高橋弘司／元毎日新聞社勤務）

・湾岸危機でまさかの「人間の盾」（竹内良知／元三菱商事勤務）

第三章 誇り高きペルシアの人びと…

イラン

・エリア解説

・ボスが絶対のイラン式交渉術（崎山望／三井物産勤務）

・女性支局長ならではの取材（中川千歳／共同通信社勤務）

第四章 西洋に最も近いイスラーム圏…

トルコ

・エリア解説

・ビジネス契約のローカルルール（福島晴夫／福島技術士事務所）

・トルコで就労・結婚（江里口祥子クトゥル／日系自動車企業の在トルコ法人勤務）

第五章 イスラーム？それとも地域の風習？…

南アジア

・エリア解説

・断食月のビジネスは要注意（安藤公秀／三菱商事勤務）

・母子保健プロジェクト、成功のカギ（田中香／パデコ勤務）

第六章 イスラームとの新しい付き合い方…

東南アジア、そして日本

・エリア解説

・東南アジアで本物の日本麺を（小山郁男／桃太郎食品）

・現地の人も驚く地道な日本式営業（堀哲弥／ヤクルト本社勤務）

・日本でムスリムの観光客を迎える（松井秀司／ミヤコ国際ツーリスト）

あとがき（桜井啓子）